

主体的な学びをつくる言語活動

——「大造じいさんとガン」の紹介帯づくりを通して——

藤 田 智 之

1 はじめに

新学習指導要領の完全実施まで、小学校では1年となった。大きな改革の中で、これまでとは違う視点で、さらに付け加えられた内容を確認しながら、新しい形の授業を目指さなければならないと考える。「これまで通りの授業で大丈夫ですよ。」という声を聞くことがあるが、戦後最大の改革とまで言われる今回の改訂をこれまで通りとして片づけるわけにはいかない。どの内容についても、喫緊の課題であり重要なことであると考ええる。

国語科の目標を見
てみると、形式も
内容も変更されて
いる。図1は現学
習指導要領の国語
科の目標^(註1)、図2
は新学習指導要領
のものである^(註2)。

注目したいのは、
新学習指導要領国
語科の目標の一文
目である。「言葉
による見方・考え方

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

図1 現学習指導要領 国語科の目標

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

図2 新学習指導要領 国語科の目標

を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」と記されている。その中でも、「言語活動を通して」という部分が、重要であると考えられる。国語科の資質・能力を育成するためには、言語活動を通さなければならないと言っても

過言ではない。教師の一方的な教え込みや教師指主導の一斉授業ではなく、児童生徒が主体となる言語活動を通して、力をつけていく必要がある。

今回の実践研究では、そのことを踏まえ、言語活動を中核に据えた授業を展開し、言語活動の在り方を考える。

2 学習の実際

2-1 授業実践

- (1) 日 時：平成 30 年 11 月 6 日（火）～11 月 16 日（金）
- (2) 学 年：5 年 32 名（男 16 名，女 16 名）
- (3) 単元名：すぐれた表現に着目して，物語のみりよくを伝え合おう
- (4) 教材名：大造じいさんとガン
- (5) 単元目標
 - ・登場人物の相互関係や心情，場面について描写を捉え，優れた叙述について自分の考えをまとめることができる。
 - ・意見を交流し，自分の考えを広げたり深めたりすることができる。
 - ・語感や言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつことができる。
- (6) 指導計画（全 7 時間）
 - 第 1 次 学習計画を立てよう
 - 第 1 時 学習課題を知ろう
 - 第 2 次 「大造じいさんとがん」を読もう
 - 第 2 時 魅力ある一文を見つけ書き出そう
 - 第 3 時 グループで読みたくなる紹介帯キャッチコピーを考えよう
 - 第 4 時 紹介帯キャッチコピーをつくろう
 - 第 5 時 紹介帯キャッチコピーを書き換えよう
 - 第 3 次 学習を振り返ろう
 - 第 6 時 個人で紹介帯キャッチコピーを考えてつくろう
 - 第 7 時 つけた力を確かめよう（テスト）
- (7) 単元について

本作品は，優れた情景描写や登場人物の相互関係を表す描写が細かく描かれている。場面の転換や物語のクライマックスの部分などに，登場

人物の心情を表す優れた叙述が随所に見られる。情景描写や行動描写のすばらしさに、生徒は物語の世界に引き込まれるであろう。この優れた叙述について、どの表現が自分に強い印象を与えたのかを考え、それをグループで交流することで、自分の読みを確かなものにするとともに、他者との感じ方の違いを知り、多様なものの見方や感じ方、考え方に触れさせたい。

全体的な構成は、「まえがき」と「本文」に分けられる。本文は、1年間という区切りごとに、エピソードが4つの場面にまとめられ、大造じいさんの残雪に対する心情の変化が描かれている。具体的には、各場面で残雪をとらえるために迎えうつ大造じいさんの猟師としての様子が、1年ごとにまとめられている。1つ1つの出来事が丁寧に描かれ、その年の出来事に次の年の出来事がつながっていくため、時間の経過や場所の設定が理解しやすく、展開が読み取りやすい構成となっている。また、会話文や地の文の中で、大造じいさんの気持ちを直接表現していたり、情景描写を通して大造じいさんの心情を暗示的、間接的に表現していたりと、さまざまな叙述から考えをつなげたり広げたりすることができる。

このように工夫された表現を読むことで、登場人物の心情の変化を読み取ったり、直接表現されていない心情を想像しながら読み取ったりする力を付けることができると考える。そして、色彩表現や比喻・オノマトペ等の効果的な表現の工夫からも、どの表現を根拠にして自分の考えを形成したのかを伝え合うことで、見方・考え方を広げたり深めたりするのに適した教材であると言える。

2-2 教室の事実

(1) 第1時の授業

①授業の流れ

- ・学習課題を提示する。
- ・学習計画を説明する。
- ・言語活動例を例示する。
- ・本文を黙読する。

②授業の実際

まず、学習課題を提示し、学習計画を説明した。学習者が、本単元で何を、どのような方法で、どのようなことをしていくのかを示すためである。教師が、その時々状況で予定や内容を自由に変更するのではなく、学習者である児童が、自分達の学習として意識づけることや目標（ゴール）に向かって、計画的に学習を進めることを目的としている。

図3は、本単元における学習課題・計画プリントである。学習課題には、①指導事項「心惹かれる名文を引用し」、②思考操作「表現と関連付け」、③言語活動「紹介帯を書こう」を示している（註3）。

全7時間の授業の流れは、学級全体で行う時間とグループで行う時間に分かれていること、特にグループ学習では、3時間でおよそ何を行うのかについて説明を行った。その際、第3・4・5時に示した内容はあくまでも例であり、グループで話し合い、どのように進めるのかを決めるように伝えた。

次に、言語活動について説明した。今回の実践では、書店等で販売されている本の帯を見せ、帯にどのようなことが書かれているのか、自分ならどの帯に興味があるのか、どの帯を見て本を読みたくなったのかに

単元 「大進いさんとガン」を紹介帯で伝えよう 学習課題 この単元では、すぐれた表現から登場人物の心情や場面の様子をとらえ、自分の考えをもつことができるようになる学習をします。 心ひかれる名文を引用しその表現と関連付けて、自分の考えをまとめ、四年生が読みたくなるような紹介帯を書きます。	1時間目 学習課題を知る。（全体） （学習計画） すぐれた表現に着目する ●物語では、人物の言葉や行動、そのときの人物の様子、場所の様子などが、目に見え、耳に聞こえるように生き生きとえがかれる。 ●それらの表現に着目して、内容をとらえることが大切である。 ●場面の様子や風景をえがいた表現からも、人物の心情や性格を想像することができる。このような、情景をえがいた表現（情景描写）に着目することで、物語の読みが深まっていく。 魅力ある一文を見つけ書き出そう（全体） 2時間目 グループで読みたくなる紹介帯を考えよう（グループ） ○「名文の場面」の書き方を知り、書く。 心ひかれる名文がある場面は、物語全体の中でのどのような位置にあるのか。物語全体とその場面の関係をかんけつに書く。 3時間目 紹介帯のキヤッチコピーを考えて書く（グループ） 「心ひかれる一文」と「名文の場面」から、物語全体との関係が分かるようなキヤッチコピーを書く。 4時間目 紹介帯のキヤッチコピーを考えて書く（グループ） キヤッチコピーを発表する。（全体） つけた力を確かめる。（テスト） 5時間目 6時間目 7時間目
--	---

図3 学習課題・計画プリント

ついて話し合った。

その後、モデルとして図4の「スーホと白い馬」と図5の「ごんぎつね」を示した。

そして、実際に使用する図6の学習プリントを提示して、内容を説明した。①は、心ひかれる名文を引用する。グループで一番紹介したい名文を決めるように指示した。この引用した場面を中心に解説文を書いたり、キャッチコピーを書いたりして、紹介帯をつくることを説明した。

②は、引用した名文の場面や登場人物の心情を解説する。解説では、100字で名文がどのような場面であるのかを簡潔に記述するように伝えた。図7は、手引きとして配布したプリントである。

③は、「物語全体」と「引用した名文の場面」をもとに紹介帯を書く。ここでは「○と○」という「と」でつなぎ、キャッチコピーをつくるように指示した。

「全体」と「(名文の) 場面」というように、引用した場面をもとに、全体の内容を捉えさせたいと考えた。

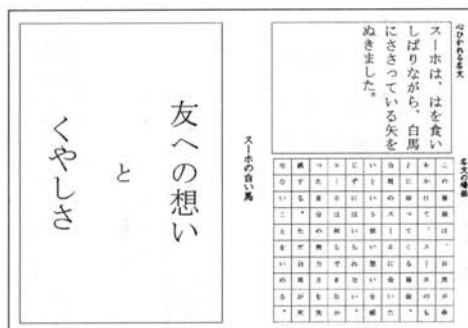


図4 モデル①

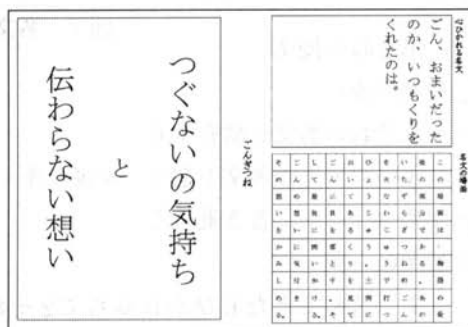


図5 モデル②

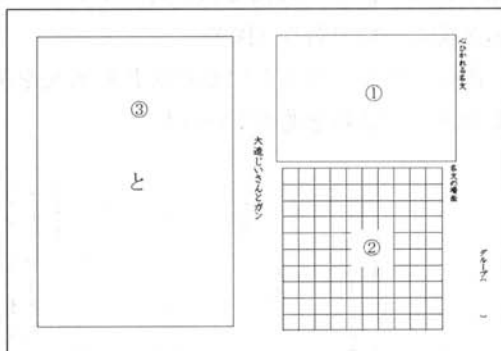


図6 紹介帯の学習プリント

この3つの部分をグループと個人で作成することを伝え、学習としてのゴール(到達点)を示し、質疑応答を行った。最後に、「大造じいさんとガン」を黙読した。



図7 名文の場面解説の手引き

(2) 第2時の授業

①授業の流れ

- ・それぞれの名文を紹介する。
- ・グループで1つ名文を選び、解説やキャッチコピーについて話し合う。
- ・学習プリントに書き進める。

②授業の実際

まず、選んできた心ひかれる名文をそれぞれが発表した。その際、選んだ理由等も話すように指示した。リーダーを中心に、選んだ一文や文章を紹介し、その理由を伝え合っていた。以下、児童が選んだ心ひかれる名文の一例である(図8)。

次に、グループごとに心ひかれる名文を決めたり、再度本文を読み直したりして活動を進めていった。

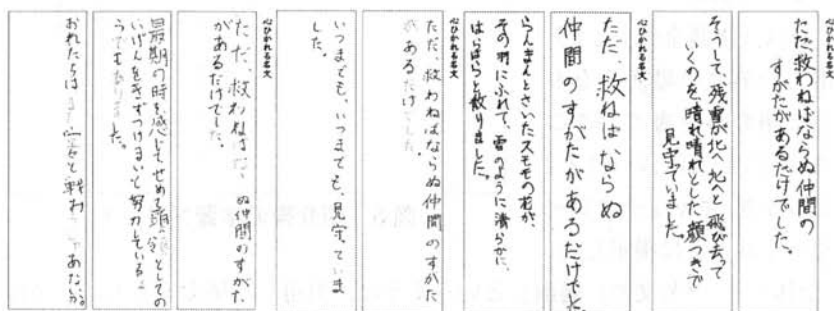


図8 児童の引用した心ひかれる名文の一例

(3) 第5時の授業

①授業の流れ

- ・各グループのキャッチコピーを提示して良いものを2つ選ぶ。
- ・上位2つの作品の良さを全体で確かめる。
- ・キャッチコピーを再考する。
- ・キャッチコピーに込めた思いを伝え、もう一度良いものを選ぶ。

②授業の実際

まず、グループでキャッチコピーを確認させた。その後、黒板に10グループのキャッチコピーを提示した。各グループのキャッチコピーは、図9の通りである。





図9 グループの紹介帯一覧

この中から良いと思ったキャッチコピーを2つ選んだ。選んだ結果は、図10にある。8グループ「仲間への想いと祝福」と6グループ「勇者残雪と一生のライバル」が選ばれた。

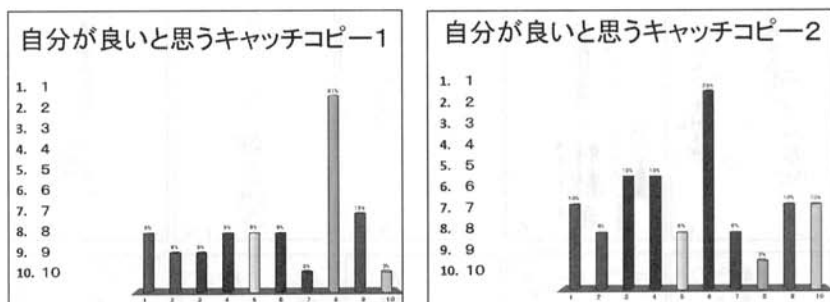


図 10 児童が選んだキャッチコピー

次に、上位2グループへの質問やどこが良かったのかを話し合った。話し合いの中では、「なぜ祝福なのか」や「どうして勇者という言葉を使ったのか」など、グループ内でも学級全体でも議論があった。また、その他のグループへの質問も行った。同じ言葉でも、意図や根拠とする部分が違ったり、その反対があったりと、グループや個人によって考え方や感じ方の違いを確認することができた。

その次に、今の話し合いをもとに、自分達のキャッチコピーを書き換えたり、自分達の想いが伝わる言葉になっているのか、もっと良い言葉はないのか等を話し合ったりした。

修正があるグループは、二重線で消したり、言葉を書き加えたりして、発表を行った。全10グループで、書き換えたグループが7つあった。以下、図11はグループの最終プリントである。(書き換え等があったグループには、右上に○で示している。)

最後に、それぞれのグループが全体に意図を発表し、投票を行った。結果、7グループの「今日の敵と明日の仲間」が1位に選ばれた。

多くの子どもがこのキャッチコピーに投票したのは、「今日」と「明日」、「敵」と「仲間」を対比的にとらえ、登場人物(大造じいさん)の気持ちの変化を表したものとなっていることや物語全体と1場面を表す言葉になっていると考えたからであろう。このグループは話し合いの中で、「策略」という言葉に満足しており、1回目の投票で上位を入れると思っていた。しかし、他のグループからの質問によって、名文との関係や物語全体と名文の場面の関係から、わかりにくい表現になっていると気づき、



図 11 最終のキャッチコピー一覧

よりシンプルでわかりやすく、自分達の思いを伝えられるようにするにはどうすればいいのかを話し合っていた。「今日の敵と明日の仲間」も、3人が全員納得したものではなかったが、時間の中でこれがベストであると判断し、提示し説明したものであった。

3 実践からの考察

授業を行う過程や授業後の分析の中で多くの成果と課題があった。このような学習課題やモデルを提示した学習活動では、主体的に学ぶ姿や見通しをもって取り組む姿を見ることができ、グループや個人と関わる時間を多くもてるようになった。その意味では、より子ども同士、子どもと教材、子どもと教師の距離を縮めることができた。一斉授業や輪切りの活動では見ることのできない活発に話し合う子どもの姿を発見することができた。

一方で、支援の難しさを実感した。支援を求めているタイミングで支援できるかどうかは、子どもを見取る力や関わりや経験的に培ってきた勘、微妙な表情の変化に気付くことができるかどうかに関わってくる。その部分では、学級経営的な部分が大きく関わってくる。子どもの力を適切に把握しなければ、適切な支援はできない。今回の授業でも、課題

としてこの点を挙げるができる。

【成果】

○見通しを持って粘り強く取り組む姿

今回の実践では、学習課題とモデルを提示することにより、子どもは見通しをもって学習を進めていた。グループによっては、お互いの意見が真っ向から対立し、なかなかまとまらなかったところもあった。それでも、最後まで粘り強く話し合い、決められた時間内に発表するための学習プリントを仕上げることができた。ふさわしい言葉ということで自主的に、辞書等を活用したり、時間ぎりぎりまで1つ1つの言葉を確認したりする姿が見られた。

この姿は、中央教育審議会の答申の主体的・対話的で深い学びを実現する意義に示された「主体的な学び」、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。」^(註4)につながっていたと考える。見通しをもって、限られた時間の中で粘り強く考え話し合う姿は、まさに今後求められる姿といえる。

【課題】

○適切なタイミングでの支援

10グループが学習している中で、1つ1つのグループを見回り、時には一緒に話し合いに参加しながら状況を確認する。話し合いの方向性がずれていれば修正していけるように助言したり、もてる力を引き出すために質問したりしてきた。しかし、今回の実践ではキャッチコピーとしての「○と○」が、「大造じいさんとガン」を対比したものになったグループがあった。

その意味では、各グループに適切な支援を行うことができなかったと考える。第1時の説明だけではなく、途中でも全体に向けての問いかけや全体指導を入れる必要があったかもしれない。しかし、全体への問いかけや指導は、それを必要としないグループにとっては、学習を進めていく上で、無駄な時間になりかねない。そのことも踏まえたうえで、今後どのように適切な支援を行っていくか考えていく必要がある。

4 おわりに

言語活動を通して、国語の力を育むことは容易ではない。本実践でも、授業を通して子どもと向き合い、多くの改善点が見つかった。その一部を本論でまとめた。授業をしながら修正したり、変更したりと子ども達の活動に支障をきたさないように配慮しながら学習活動を見守り指導した。

その中で、言語活動の奥深さを感じると共に、子ども達にとって魅力的で、今の力をさらに伸ばすための言語活動とはどういったものなのかを今後も模索する必要がある。子どもの実態にあった活動、つまり今もっている力を出し切り、さらに一步先にある力を身につけることができる活動であり、学習指導要領で示されている言語事項と照らし合わせ、学びに浸ることができる活動である。

今回の実践でも、多くの場面で子ども達に助けられ、また新たな発見をできたことは貴重な財産となった。今後も、子ども達の国語の力を伸ばすことができるように授業を構築し実践していきたい。

(本学附属京都小中学校教諭)

註

- (1) 文部科学省 (2008)「小学校学習指導要領解説 国語編」東洋館出版社, p9
- (2) 文部科学省 (2018)「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 国語編」東洋館出版社, p11
- (3) 達富洋二 (2019)「『主体的・対話的で深い学び』を実現する言語活動の実践例」, 国語教室実践紀要第 1 回研究大会, p40
- (4) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf

参考文献

- ・大村はま (1982)『大村はま国語教室 1 国語単元学習の生成と深化』, 筑摩書房
- ・倉澤栄吉 (1987)『倉澤栄吉国語教育全集 1 国語単元学習の開拓』, 角川書店
- ・府川源一郎・高木まさき編著 (2004)『認識力を育てる「書き換え」学習』, 東洋館出版社
- ・日本国語教育学会 (2010)『国語単元学習の創造 V 小学校高学年編』, 東洋館出版社
- ・達富洋二他編 (2011)『国語授業の新常識「読むこと」』, 明治図書
- ・藤田智之 (2012)「読解の授業におけるパラフレーズの効果」『日本教科教育学会第 38 回全

国大会発表論文集』, pp158-159

- ・ 藤田智之 (2013) 「話す力の育成を目指したパラフレーズの効果 - モニタリングを活用した実践から -」, 『日本教科教育学会第 39 回全国大会発表論文集』, pp62-63
- ・ 西原宏一, 達富洋二 (2016) 「小学校国語科単元学習におけるコンパクトライティングの有効性」, 『佐賀大学教育実践研究』, pp41-53, 佐賀大学文化教育学部附属教育実践総合センター
- ・ 藤田智之 (2017) 「教科書教材を活用した小学校国語科単元学習の実践研究」『京都教育大学国文学会誌 45 号』 pp51-64
- ・ 達富洋二 (2017) 「学習課題と学習のふり返りを重ねる」『国語教育 2017 年 3 月号』 pp30-33
- ・ 藤田智之 (2018) 「思考操作「比べる」を活用した小学校版国語科単元学習の実践研究～小学校 1 年生「じどう車くらべ」の実践から～」『九州国語教育学会紀要 7 号』 pp91-101
- ・ 藤田智之 (2018) 「大切な情報を抜き出し「比べる」力を育成するための授業実践 - 1 年生「どうぶつの赤ちゃん」から -」『京都教育大学国文学会誌 46 号』 pp71-84
- ・ 達富洋二 (2018) 「問いを立てることからはじめる単元の創造 - 国語教室の創造 / 形式のコピーから意味の創造へ -」『佐賀大國語教育第 2 号』 pp22-31

付記

- ・ 本研究は, 平成 30 年度教育研究改革・改善プロジェクト経費「語彙力を高めるための指導法の開発 - コンパクトライティングの活用と実践 -」(No.30-28) の研究助成を受けた研究成果の一部である。